

諏訪小だより

令和4年1月31日

2月号

多摩市立諏訪小学校

校長 齋藤 幸之介

難局に際し、今思うこと
—誰もが「安心」にいられることを目指して—

校長 齋藤幸之介

新型コロナウイルスの変異株「オミクロン株」の感染力は想像を絶するほどであり、日々伝えられる新規感染者数に戦々恐々としします。

この難局に際し、私は東日本大震災を思い出しました。あの日から1ヶ月ほどが過ぎた頃、「PRAY FOR JAPAN—3.11 世界中が祈りはじめた日」(2011年 講談社)が発刊されました。この本は「今なお不安な生活を余儀なくされている方々に、そしてすべての人に向けて、すこしでも前向きな気持ちや温もりを感じていただけたら幸いです」で始まります。

人々が関わる、ということ

ここには、次のようなメッセージがあります。「CNN に登場した千葉在住の米国人学生「私は混乱したが、まわりの日本人は違う。落ち着いてまわりの人で声を掛け合っている。お互いの状況を確認し、励まし合い助け合う。日本人は偉大だ。日本は大丈夫だ」。また、「今まで以上に力強い国になりますように。皆が優しく分け合う心を持ち続けられますように。一人の力ではどうにもならないことでも、多くの人の知恵と力で共感・共鳴の和が広がっていきますように」も紹介されています。特に、昨今多く聞かれるようになった共感といった表現は、苦しい今だからこそ響くのかもかもしれません。

共感の捉え方

共感の捉え方は多々あると思いますが、例えば、「相手の感情に関心を向けるということ」と「相手が置かれている状況や自分ができることを捉えること」と説明されることがあります。前者については、他者の身になる能力と他者の気持ちを推理する能力とが大いに関係しているそうです。人間にはこのような能力が元来備わっている、ということです。かつて、共感を「想像の中で、苦しんでいる人の身になること」と表されたこともあったそうです。

「みんな」の難しさ

しかし、一方で、自分の共感の仕方が本当に適切であるかどうかは難しいかもしれません。以前「世界の哲学者に人生相談」(NHK for school)に出演さ

れていた小川仁志先生は、子供たちに向けた本のことで、いい悪い、をどのように決めるのかを説いています。小川先生は「自分がいい、と思っても、他の人からするとよくないこともある」と説明しています。このときに大切にしたいことは常識、「みんなが抱いている共通の感覚」と説明しながらこの大切さを挙げ、しかし一方でこの難しさも指摘しています。価値の多様化などと言われるようになって久しいですが、「みんな」というのは本当に難しいです。

「多角的」—様々な立場を捉えること

私共が学校で教育活動を行う際に拠りどころの一つとしているのが学習指導要領です。私は、平成29年に改訂された最も新しい学習指導要領の中に「多角的」という表現をいくつか見つけることができました。多角的は、一つの物事を様々な立場から見る、という意味にも使われます。

今回、様々に苦勞をしてきた子供たちが多くいます。一人一人にかける言葉がとても難しいと感じます。また、SNS等の活用も含めた適切な情報発信のあり方を考えさせられました。しかし、このような状況だからこそ、本校の子供たちを多角的に見つめ、人間がもつ「共感」する能力を生かしながら、一人でも多くの人々が安心するためのメッセージを送れるようになる大切さを子供たちに伝えたいと思っています。このことは、まさしく「皆が優しく分け合う心」と思うのですが、いかがでしょうか。

1月下旬には、本校の急な変更等に柔軟な御対応を賜り、誠にありがとうございました。御理解を賜りましたことに、深く感謝を申し上げます。

本校教職員は、この間精一杯取り組んでまいりました。御不便をおかけしたかと思いますが、諸事情をお察しの上、お力添えを賜れた、と有難く思っております。

今後共どうぞよろしく申し上げます。

<参考>

小川仁志『哲学で子どもの思考が伸び、心が成長する』

(2018年 ジアーズ教育新社)

フランス・ドゥ・ヴァール『共感の時代—動物行動学が教えてくれること』(2010年 紀伊國屋書店)